家族の形　2024.3.9

女性は家父長制によって虐げられてきたと言われるが、本当にそれだけの理解で良いのだろうか。核家族化した明治以降、とりわけ戦後の性別役割分業化した社会になって、女性は気がつかないうちに劣位化させられて、対男性の地位が下がったのではないだろうか。

１９３５(昭和１０)年から１９３６(昭和１１)年にかけて、熊本県須恵村に滞在したアメリカ人のエラ・エンブリーが感じた「須恵村の女たち」には次のように書かれている。

女たちは、それぞれ、集団として、町の市場に農産物を出し、野良仕事に雇われ、わずかの収入を得るためのさまざまな活動に従事していたが、これらの集団はすべて、まったく非公式なものとして組織されていた。これらの経済的活動のどれもが、男の活動のように、家族の財政的福利にとって決定的に重要なものではないが、それにもかかわらず、彼女たちは男の活動の重要な補足をなしていたのである。

彼女たちは、煙草、酒、性に楽しみを見いだしていた。おそらく、いたるところの百姓の女たちと同様に、彼女たちのユーモアは土くさく、性的な関係についての話は率直で、隠しだてのないものだった。P525

何人かの女たちがしばしば、みずから進んでおこなった離婚と再婚の驚くべき数については、さらに詳しく検討する必要がある。なぜ、男たちは不貞の妻を我慢したのか。どのようにして、離婚した女性は、別の夫をそんなに簡単に見つけられたのか。その回答は、少なくとも部分的には、当時の小さな小売商の家や農民の家が要求していた労働力の性格のなかにある。（中略）そこでは、なされなければならない多くの仕事があり、その絶対最小限の労働力は二人の壮健な大人であった。P526

昭和になっても、須恵村のような田舎まで近代は浸透しておらず、前近代の女のあり方が残っていた。江戸時代は日本の多くの場所が須恵村と同じだったと思う。「彼女たちは、煙草、酒、性に楽しみを見いだしていた。(中略)性的な関係についての話は率直で、隠しだてのないものだった。」というのは現在ではどうなっただろうか。女が酒や性を楽しみ、性的な関係について率直で隠しだてなく話すことは、現在では許されているだろうか。

１８７８(明治１１)年に来日して「日本奥地紀行」を書いたイザベラ･バードは、日本の庶民の体躯をアイヌ人と比べて次のように書いている。

日本人の黄色い皮膚、馬のような硬い髪、弱々しい瞼、細長い眼、尻下がりの眉毛、平べったい鼻、凹んだ胸、蒙古系の頬が出た顔形、ちっぽけな体格、男たちのよろよろした歩きぶり、女たちのよちよちした歩きぶりなど、一般に日本人の姿を見て感じるのは堕落しているという印象である。P405

支配階級と被支配階級の体躯の違いは、イギリス人を例に良く語られるが、わが国でも同様だったのではないか。そして、家庭での彼(女)等の生活を次のように書いている。

私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手をとり、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭りに連れて行き、子どもがいないといつもつまらなそうである。他人の子どもに対しても、適度に愛情をもって世話をしてやる。父も母も、

自分の子に誇りをもっている。P131

いずれも家父長制といった言葉で語ると、抜け落ちてしまう家族状況ではないだろうか。下記はより重要だと考える。

仕事中はみな胴着とズボンをつけているが、家にいるときは短い下スカートをつけているだけである。何人かりっぱな家のお母さん方が、この服装だけで少しも恥ずかしいとも思わずに、道路を横ぎり他の家を訪問している姿を私は見た。P146

立派な家のお母さんは下スカートだけ、つまり胸を開けたままで外へ出ている。すでに近代人となっていたイザベラ･バードは恥ずかしいとも思わずと言っているが、乳房を見せることに当時の日本女性は羞恥心がわかなかったのだろう。

現在では小学生でも胸を見せることに羞恥を感じるので、身体検査も着衣のままにせよという声がある。また戦後もしばらくは農家の女性も立ち小便をしたが、今の女性は立ち小便は恥ずかしくてできないと言うだろう。ちなみにインドでは男は道端にしゃがんで小便をするが、小便がすむとすっくと立ち上がって、ごく自然に歩き始める。

何に羞恥を感じるかは時代や社会により異なる。羞恥を感じることによって自ら行動を制限するのだから、恥ずかしいと感じさせることはきわめて強力な支配力だろう。

離婚それ自体は単なる事実であるが、離婚を非難する視線が恥ずかしいから、離婚をとどまるとしたら、これは支配力の一形態と考えるべきだろう。また、核家族化したことにより、不倫は悪として女性に内面化されて、女性の性行動を内面から拘束するようになった。レスが言われる現代、女性は性に楽しみを見いだし率直に語れているだろうか。

農業時代の大家族よりも、性別役割分業にもとずく近代化した核家族のほうが裕福だから、女性が大切されているように感じるかも知れない。しかし、前回話題になったように、核家族の始まりはロマッティク・ラブからだとすると、女性は愛される幻想をもたされて＝マインドコントロールされて、男性支配の愛の核家族に送り込まれたのではないか。

性ホルモンの分泌が減って交わる回数が減ってくると、性別役割分業の核家族には男女をつなぐものは子育てを除いて何もなくなる。子育てに励む彼女たちは、アリス･ベーコンやイザベラ･バードの描く、泥まみれになって男と一緒に働き、労働と収穫の喜びを男と共有していた前近代の女たちより幸せなのだろうか。

家父長制により女性が虐げられていたのは、人口の１０％だけだった前近代の支配階級の女性たちと、明治になって家制度を庶民にまで拡張したことによって被害者となった女性たちだろう。庶民の女は家父長制に呻吟してはいなかったように感じる。また、核家族になって離婚時に子供を女性が引き取る例が多くなったが、これにより女性は再婚が難しくなり、かつ貧困化するようになった。かつては女は子供を婚家において離縁した。子供と母親の繋がりを男親以上に強調するのも、核家族になって生み出されたものだろう。

貧しい前近代に生きた女のほうが、心身ともに男に縛られずに、貧しい中でも自由に生きていたのではないだろうか。女性はロマッティク・ラブに目をくらまされて、核家族という牢獄に送り込まれたように感じる。女性たちが望んだ近代の性別役割分業にもとずく核家族は、男性支配の歴史上最強の形態ではないだろうか。暴力による強制力よりも観念による支配のほうが、被支配者を自発的に行動させて強烈な力を発揮するのだ。　匠雅音